

# 9 漢方薬物学

## 総論

### はじめに

漢方処方に用いられる薬物は、動物・植物・鉱物などの天然物である。これらは、生薬、あるいは和漢薬、漢薬、中薬と呼ばれる。これらの薬物に関する知識は、漢代に成立した『神農本草経』を基礎として発達してきた。この学問体系を本草学という。

本来の本草学は、生薬の真偽や品質・産地などに関する博物学的な知識をも多く含んでいるが、現在では薬効に重点を置いて、臨床的にまとめられた漢方薬物学が一般に用いられている。生薬は、伝統的な漢方医学理論にもとづいて使用される。生薬学・薬理学などの発達により、これら生薬の成分やその薬効はかなり明らかになったが、漢方医学的な運用を行う場合に、応用しうるものはあまり多くない。漢方薬を投与するに当たっては、やはり伝統的な考え方による必要がある。

以下に、漢方薬物学に関する基本的事項と、薬効学および代表的な生薬の薬効を概説する。

### 生薬の採集・生産と流通

上述のように、漢方薬の材料は天然物である。これらの薬物は、野生のものもあり、栽培・養殖されたものもあるが、世界各地（漢方薬に使用する生薬の場合は主として中国大陸）にはそれぞれその地方に特別に

多く産する薬物があつて、それらは採集業者・生産業者・加工業者・問屋・輸出入業者などの手を通して市場に供給される。日本で用いられている生薬の90%以上は中国からの輸入品で、国産品はわずかである。

なお日本産の生薬は、中国産のものと同名であっても基原植物や加工法、薬用部分が異なっていたりすることがあるので、若干の注意が必要である。『日本薬局方』の規定は、江戸時代からの生薬産業の伝統の上に立ち、日本における事情を考慮して書かれたものであり、臨床的に必ずしも最適でない場合がある。

生薬（植物の場合）の採集に当たっては、各植物の生長発育の時期を考え、根・根茎・樹皮・葉・花・果実・種子など、必要な薬用部分を最も適当な時期に採取する。これについては成書に譲る。

### 炮製

炮製とは、生薬原料を、調剤・製剤できるような形に加工することをいう。日本では修治とも呼ばれる。その目的は、主として以下のようである。

- ①毒性や刺激性や副作用を除去したり、軽減したりする。
  - ②薬性や効能を変化させる。
  - ③製剤・調剤および貯蔵に便利にする。
  - ④夾雑物や非薬用部分を除去する。
- 炮製にはたくさん方法があるが、ここでは省略す

る。中国では、これらの炮製はごく一般的なものであり、各地に炮製工場があつて常時大量に加工され、医療に供されている。日本では、伝統的に、複雑な炮製はほとんど行われておらず、原植物の薬効をなるべく尊重する傾向がある。以下に、日本と中国で炮製の異なっている薬物について若干触れておく。

附子は、中国では熱処理した炮附子を用いるが、日本ではその他に塩と石灰で処理した白河附子も用いる。また医療用漢方製剤には、特殊な処理により減毒した「加工附子」あるいは「修治附子」が使用されている。

生姜は、中国では多くの場合生のヒネショウガのことであるが、日本では乾燥させたショウガ（乾生姜）のことを指す。乾姜は、日本では、熱処理（蒸したもの）したものを指すが、中国では乾燥させたショウガ（日本の乾生姜）のことである。

甘草は、中国では多くの場合蜜炙甘草を使用するが、日本ではただ乾燥させただけのものを用いる。

### 生薬に備わった基本的性質

生薬には、それぞれに備わった基本的な性質がある。それらはその生薬の特徴をなしていると同時に、薬効と密接な関係がある。四気・五味・帰経・昇降浮沈・燥潤などである。

#### ①四気

四気とは、寒・熱・温・涼の温度に関する性質で、四性、薬性ともいい、生体内で寒（涼）性に働くか、熱（温）性に働くかの指標である。寒は涼よりも寒性が強く、大寒はさらにそれに勝る。熱は温よりも熱性が強く、大熱はさらにそれに勝る。薬性がはっきりしないものは平というが、それでもどちらかに偏っていれば微寒、微温という。寒薬は熱性の病態に用い、熱薬は寒性の病態に用いるのが原則である。以下に若干の例をあげる。

**大熱**：附子・乾姜・肉桂

**熱**：呉茱萸・蜀椒・高良姜・胡椒・丁香

**温**：麻黄・杏仁・当归・陳皮・五味子

**微温**：人参・大棗・防風・独活・山楂子

**平**：甘草・茯苓・桃仁・桔梗・枸杞子

**微寒**：柴胡・麦門冬・栝楼根・白芍・菊花

**涼**：薄荷・葛根・浮小麦・牛黄・枇杷葉

**寒**：黄连・生地黄・知母・金銀花・大黄

**大寒**：石膏・天門冬・大青葉

#### ②五味

五味とは、辛・甘・酸・苦・鹹の五種の味覚に関する性質をいう。この他に淡や渋があり、実際には五種ではないが、五味は基本的な味であるので、古来よりこの名称が用いられてきた。そして、これらの味は、それぞれ特有の薬効を有する傾向がある。

辛は、発散・行気・行血の作用があり、一般に、邪が衛表（表や衛分）にあるもの、気機が鬱滞しているもの、血行が阻滞しているものに用いる。

- 例）
- 発散：麻黄・薄荷
  - 行気：木香
  - 行血：紅花

甘は補血・和中・緩急（急迫症状を緩める）の作用があり、一般に諸種の虚証に用いるほか、拘急や疼痛を緩和し、薬性を調和する。

- 例）
- 補益：人参・熟地黄
  - 緩急：甘草・蜂蜜
  - 薬性調和：甘草

酸は、収斂・固渋の作用があり、一般に気・血・津液・精がけじめなく漏れ出る病態や、肝の疏泄過多に用いる。

- 例）
- 収斂固渋：五味子・山茱萸
  - 疏泄調和：白芍

苦は、泄（降・瀉）・燥の作用があり、一般に腸熱による便秘や、肺気が上逆したもの、湿邪が脾を障害したもの、湿熱による病態などに用いる。

- 例）
- 泄：大黄・杏仁・山梔子
  - 燥：蒼朮・黄连

鹹は、軟堅（堅いものを軟らげる）・散結（結聚したものを散じる）・瀉下の作用があり、一般に、ある種の腫瘍や便秘などに用いる。

- 例）
- 軟堅散結：牡蛎・昆布
  - 瀉下：芒硝

渋は、酸に似て収斂・固渋の作用がある。

- 例）
- 渋精：竜骨
  - 渋腸止瀉：赤石脂